

自分の方法への前段階としての模倣入門

はじめに

この2か月ぐらい模倣について気になっています。生物は周りの模倣によって、環境の変化に対応してきた歴史があります。カイヨワの『遊びと人間』には遊びの分類として「ミミクリ」、という模倣を意味する概念が出てきます。

しばらく調べてみて、ある程度まとまってきたら何か一つの文章にまとめて見ようと思っています。中間発表のようなイメージでしょうか。でも、ただ調べたことをそのまままとめても何も面白くありません。かといって、ちょうどいい落としどころを見つけられていません。

でもここで、「見つけられていない」というのはおかしいって思います。だって、僕は現在模倣について気になっています。日々何らかの形で模倣について気になることが出てきたりします。

でも模倣と言ってもいろんな観点があります。単純にカメレオンとか昆虫の模倣もあるし、クリエイターや芸術的な意味での模倣もあります。だから、僕が今模倣について気になっているとき、必ず文脈や流れが存在します。なぜ僕のセンサーに模倣が引っかかったのか考えてみると、「人のやり方を真似することと、自分のやり方を見つけることのバランスや移り変わり」について気になっていたのだと分かりました。

なぜ模倣か

「守破離」や「学ぶは真似ぶ」という言葉があるように、何かを取り組む際にはそれをうまくやっている人のやり方を真似するのが有効な場面は数多く存在します。一方で、「他の誰かがやっていることをしていても仕方がない」という言説もよく目にしますよね。「オリジナリティが大事だ」的な話です。

ここで、じゃあどうバランスをとればいいのか、という問題が出てきます。もしくは、どっちかが先に来るべき、という順序の話なのかもしれません。その場合でも、いつまで人の真似をしていつから自分のやり方を考えればいいのか、一定の期間で区切ることができるものなのか、感覚的に判断していくものなのか、いろんな可能性が考えられます。

僕は人のやり方を参考にして取り込んで、真似できない部分から自分のやり方を見つけていく、というアプローチをとることが多いです。ここをもっと掘り下げていくと、面白いことがある気がしました。

というのは、基本的に生活の全てが常に大満足ということはなかなかないですよ。別に、全くこの先どうしていいかわからないというほどの深刻な悩みでもないが、でも日常生活の中でももう少しクリアにしたい、または改善したい問題がある、という状況はいつでもあるはずですよ。

例えば、ブログで言えば、「毎回の記事にかかる時間が長く費やすエネルギーが大きいので、もっと負担のない方法を探っていきたい」みたいな感じです。この時、文章を書くことを仕事にしている人の話などは参考になります。作家の執筆術を見て何かいいやり方を見つければ、取り入れてみたりするでしょう。でも100%その人のやり方で心地いいということにならない限り、そこにに関して快適なやり方を見つけていこうとするかもしれません。

こういう流れで、模倣から自分のやり方を見つける段階に移行していきます。ダイエットにしても、インフルエンサーや本などを参考に真似して「この部分は自分には合わないな」ということが出てくると、そこではじめて自分にちょうどいい形に調整していきます。

とにかく、目の前の問題を解決するために、心地よく過ごしていくために、自分だけの方法を見つけていきたい、開拓していきたいとき、それには最初の段階があって、それは模倣である、だから模倣について考えることは、より快適に過ごしていく方法を模索していく上で、その前提となるツールの性能を向上させることである。

という流れで、僕は模倣について気になっていたんです。つまり、「自分の方法を見つける前段階としての模倣」という文脈です。この意味での模倣について掘り下げていきたいのです。問いが明確になったので、答えの形も決まります。

そしてこれがコンセプトやテーマというものです。だから僕は、数週間後に、このテーマでまとまった文章を書くようになるのです。こういうコンセプトが見つかるのが面白いです。そこが僕たちそれぞれの工夫のポイントだからです。

超個人的な問題は普遍性を宿す

もちろんですが、知識を増やしたいとか教養を身につけたいのではありません。この世界の模倣という概念の内、僕の生活とガチガチに結びついていて、日常に大きく影響のある領域だけを知りたいんです。この形で進めると、ただの情報、ということにはなりません。だから面白いです。

ブログやレポートや本は、もっと言えば、個人的な自由研究、独学、人生単位での探求は、このコンセプトに気づき満足するまで掘り進めることの繰り返しと言ってもいいのかもしれない。

こういうものの集まりがエネルギーの源泉とか湿地だと思ってるんですね。で、その人固有の問題意識から得た答えは、その人独自の解決方法で、工夫で、知恵です。つまり、それはその人の方法ってことです。だからちょっと極端な言い方をすれば、その文脈でその概念を扱ってるのはその人だけってことにもなります。

つまり、何か気になってることが出てきたとき、それは現状の生活とほとんどの場合関係付いていて、だから、その問題の解決に向かう中で得たものをその文脈に沿って整理していくと、それはその人にしか書けないものってことになります。

しかもそれは超個人的な生活と結びついているので、空想上の概念や理念などではなく、最も具体的です。だから本人だけでなく、他の人にとっても自分の生活をより快適にする助けになり得ます。社会に開かれたものになる可能性が高いのです。自分でただ調べて考えて満足して終わらないんですね。

自分だけで満足するんじゃなくて、開拓した後は道を整えて、誰かがそこを歩けるようにしておきたいです。というか、せつかくそこを通れることが分かったのなら、みんなでどんどん利用してショートカットしていった方がいいわけです。その分他の楽しいことに時間を使えますし、楽しい世界になります。

・・・という話をまさに数週間前に書いていたことを、僕はすっかり忘れていました。が、今回の話をするにあたって、ふと思い出しました。だから何というわけでもありませんが、以上を前書きとしまして、本編に入っていきますw

模倣と自分の方法の物語

人は模倣する生き物である。いや、人どころか生物は模倣によって生存し、進化を積み重ねてきた。環境の変化に対し、周囲を観察し、上手くやっている奴を見つけて真似をする。

既に誰かがやっていることは、そいつが効果的だと考えた末の結論である。それに間違いがなかったから、そいつは今も生き延びている。使いどころを間違えなければ、模倣はゼロから考えるよりもはるかに強力な方法なのだ。

でもそれだけでやり過ぎせるわけでもない。いくら模倣が上手であっても、それは結局その人固有のやり方である。その人と僕たちが完全に重なることはない。だからいくら上手に模倣しても、その人格にしか扱えない範囲があって、そこをはみ出ると自由自在に操ることはできなくなる。それは日常における違和感として現れてくる。

初めは誰かの方法に則ってやるだけで気分良く過ごせるものである。それは当然で、その人が時間をかけ、考え、改善した工夫の積み重ねから生まれたものであり、それだけのエネルギーがつき込まれているから。だからそれに関して素人の人間がちょっと自分で考えてやってみるよりもうまくいくに決まっている。

そんなとき、僕たちはもっと真似しようとする。

「このやり方が一番いいはずだ、だってあいつがそれでうまくいってるから、優雅に暮らしているから。もっとやれば、もっとあいつのやり方に近づけば良くなるんじゃないか」

でも、そうはいかない。やればやるほど、真似すればするほど、自分とそいつとの違いが浮き彫りになってくるのである。そいつが快適にスムーズに流れるように進んでいく箇所で、僕たちにはできないこと楽しくないことがでてくる。

そこでその方法を絶対視し、「ここまでのいい感じに来ていたのだから」と盲目的にすぎるのは失敗の始まりである。そもそも成功や失敗とはなんであるか、という話もあるが、今はそんなことはどうでもよくて、とにかく模倣を続ける中で、もっと近づこうとする中で、絶対的な違いが現れてくる。

そこが初めて自分の方法を考えるタイミングなのだ。オリジナルとの違いという違和感が生まれてきたとき、それを解消する工夫という形で、自分の方法が立ち上がってくる。それが「模倣から自分の方法への移行」である。

模倣の手前にある流れや文脈に気づいておく

自分が知りたい文脈でしか学ぶことはできない。

『吉本隆明の経済学』という本に「経済学から言語論を考える」というくだりがあるんですね。ソシュールは、まだ文字になっていない根源的なところから言語について考えました。それに対して吉本隆明は、文学と関わる部分で言語について考えたと言っています。

言語論と言っても、結局その人ごとに関心のある領域は違います。その人が生きてきた歴史や、その積み重ねとしての人格がフィルターとなって文脈を作ります。人それぞれそのフィルターを通して、今の話で言えば言語論を取り入れることになる。だから外から見れば同じテーマでも、人によって知りたい箇所は変わってきます。

何か学ぼうとする上では、「自分にとってのそんな文脈に気づいているか」が大事だと思うんですね。それが無いことには、いくら世界と接しても入ってくるものがない。「なぜそれを知りたいのか」という、極めて個人的な事情を踏まえてしか情報を摂取できないのだと思います。これは本や学びに限らず、何をするにしてもそれをどんな文脈で取り組みたいのか、というのがほとんどすべてです。

でも初めから分かっている必要がないこともあります。それは「とにかくなんかおもしろそうだからやってみる」という場合。そしてその場合が大体だったりします。最初から、「こういう理由で目的で、自分はこんなことを考えてきて、こっちに進みたいからこれをする」と分かっていることは多くはありません。だからなんとなくのノリで始めることが多いです。

ただ、何となくやってみる段階から、能動的に面白がるころに移行していくには、「それはどんな文脈にあるのか、どの角度から接すれば面白がることができるのか」を知っておきたい。それが自分の方法を探求する、ということですよね。

気持ちよくないからこそ自分の方法に移行する

なんとなくやってみるのは別に何もおかしくないのですが、そのなんとなくでずっと面白いかというとなんかそうじゃないわけですね。例えば、ギターを始めるとすれば、最初は誰かの真似をするでしょう。誰かがやってるのを見て、なんとなくこんな感じでやるのかと。最初はもちろんとしてそれ以降も、この人の弾き方がいいな、こういうスタイルがかっこいいなとか思ってみたりするでしょう。

これは真似するってことですよね。模倣です。ただ、それはどこまでいってもその人のやり方なのです。

「その人のギター人生の中で、いろんな試行錯誤を経て、いろんな人を見てきて聞いてきて、自分でもやってみて、その結果として、今その人が最も快適に楽しくできるやり方」ということです。究極的には、それで100%楽しめるのはその世界線を生きた本人だけです。道中で重なるところがあっても、どこかで分岐していくわけで、楽しくなくなってくるタイミングが訪れます。そこが自分の方法を考えるチャンスです。

「こういうやり方はちょっと向いてないかも、楽しくないかも」と思うから、「じゃあどこをどう変えれば気持ちよく続けられるのか」と考え始めることになります。もしくは、そこでまた別のやり方を真似することもあるかもしれません。そうやって自分の方法が確立していくわけですね。

ブログにしても、最初は人の真似するところから始まって、「これはなんかちょっと違う、違和感ある、好きじゃない」とか思いながら、また他の人のやり方を見つけて試しながらふらふらしつつ、一番気持ちいいやり方を常に模索していくわけですね。それはどんどん変わっていくもので、明日になればまた違った気持ちで書いてるのかもしれない。そうやって模倣から自分の方法に移行していきます。

で、その大前提として、自分の文脈や流れに注意したいということなんですね。つまり、最初の話に戻れば、文学に比重を置いている人の言語論と、それよりもっとピュアな根源に近い部分の言語論を研究したい人では、同じカテゴリーでも焦点の当て方が全く違って来るわけです。

「好奇心」が「しんどい」にすり替わる危険性

ちなみに僕がこのタイミングで言語論に触れているのは、「言語論」そのものに興味があるのではなく、書くことについて気になっているうちに、「言語と貨幣を対応付けて考える」という話が面白そうな気がして、いつの間にか流れ着いていました。

でも、もとは何をどんな目的でやっていたのか、というのは忘れないようにしないとしんどくなってきます。全然興味もないのに、ぼんやりと言語論ばかり勉強しないといけないような気持ちになってはもったいないのです。おもんないからやめてしまいますし、元々の好奇心が気付かないうちに消えていて、しんどいだけが残ります。

学びとか勉強に限らず、なんでもそうですよね。情報発信でも、「何かを発信することは人生の流れのどこに位置しているのか」に注意を払っていないと、フォロワーが欲しいとか、いいねがないからやめたとか、意味わからんことになってしまいかねません。

それが目的の人はそれでいいのですが、自分の道を探求したり、その模様を発信するという活動をもっと別のところにおいていたはずの人が、そうなってしまっただけはもったいないということですよ。

何かやっていきたい、楽しんでいきたい、続けていきたいことがあって、そのプロセスの中で模倣していく上では、それをどんなフィルターでどんな角度から見てるのか分かっておきたいのです。

正解のやり方はいつどこで生まれるのか

お試しの繰り返しによる鉄板パターンの確立

フランス料理は既にあらゆる試みがなされているせいで、オリジナリティを出すにはドライアイスを使うなどの派手なパフォーマンスをするしかないと聞いた。美術の世界では、どう頑張っても過去の誰かの手法にかすってしまうので、もはや絵画は古いらしい。

YouTube では、ヒカキンが商品紹介というスタイルで動画を投稿し、他の多くの人が似た動画を投稿し始めた。模倣である。じゃあヒカキンの最初の動画はどうやって生まれたのか。もともとそんなジャンルは存在していなかったにもかかわらず、いつの間にか正解とされるフォーマットが出来上がり、大きく外れたものは再生回数が伸びない。一番最初に始めたヒカキンはどうやってそれにたどり着いたのか。

あとから同じことをしようと思えば、その前にうまくやってる人の真似をするのは当然。でもその真似をされる人も当然別の誰かを真似している。遡っていくと最初の人には真似する対象がいなくなり、その人はどうするのか、という問題になる。

一瞬不思議に思ったんですが考えてみると簡単で、それでいい結果が出たからあとからその手法が正解とされたってことですよね。いろんなパターンを試して、たまたま反応が良かったからそのやり方を続けてみた、ということです。

もっと言えば、そのジャンルが生まれることすらたまたまで、手あたり次第試していく中で、たまたま反応のいいジャンルが現れ、次はその中でまたいろいろ試してみると、そこから反応のいい構成が出てくる。そうするとそれを正解として真似する人が現れ、それを見ていた人がまた真似をする。そして真似する人が増えていき、飽和して飽きられ、ジャンル全体が下火になっていく。でもそのときには、一番最初に始めた人はもう次のお試しを始めている。

本当はその外枠ですらお試しでしょう。ヒカキンの場合で言えば、YouTube で生活できるようにすることすらも、いくつものお試しの一つです。YouTube の前には、自分のボイパ音源を編集してCDの形で作品を作っていました。他にも遊びの延長で、本人はそのつもりではなくてもいろんなお試しをやっていたはずです。その中でたまたま反応が良かったか、手ごたえを感じたかでYouTube が選ばれ、その枠の中でまたお試しを続け、反応のいいジャンルが見つかり、その中で反応のいいフォーマットが見つかる形で進んでいきます。

目の前の状況に適用できるぐらいに模倣する

つまり、自分の方法を見つけるには2パターンある。人の方法を真似する中で現れる気持ち悪さを解消する形で、自分のやり方が定まってくる場合と、いろんなことを適当にやっていく中で、周りの反応の良さも含めたある種の気持ちよさに出会い、その最適化の繰り返しで自分が確立していく場合。

また、目に見える表面的な部分を真似すればいいだけでなく、「どんな思想でそれが選ばれているのか」「現実の状況に対してその人ならどうするか」を考えることになる。

自分の目の前の課題を解決する方法としてその人を模倣したいのだから、直接的なやり方だけを見ても仕方ないですよ。テクニックレベルじゃなくて、どんな状況で何を考えてどういう意識でその振る舞いしてるのか、ということを徹底的に調べたい。SNSでも本でも動画でもインタビュー記事でも雑誌でも片っ端から集めてきて、極端に言えば自分をいったん洗脳するわけですよw

昔、所ジョージが個人的にホットな時期があったんですが、世田谷ベースを全部読んで、YouTubeの動画をあさりまくっていれば、何となくの行動原理や哲学が見えてきます。もちろんそれですべて分かったと言うつもりはないですが、でも僕が知りたいのは「遊び」にまつわる部分だけだったので、そこに絞れば、エッセンスを抽出してくるのはそこまで難しいことはありません。

とはいえ結局部分でしかないのだから、それだけで分かった気になるなど言われかねませんが、それは所ジョージ研究科に任せればいいですw 生い立ちから何から何まで知りたいわけでもそこをなぞるように生きたいわけでもありません。

これは所ジョージに限らず、レヴィストロースの「ブリコラージュ」という概念が気になったとすれば、出来ることなら著作を何から何まで見ていくのがいいかもしれませんが、僕は専門家になりたいのではなく、その概念を自分の生活に適用したいだけです。であれば、その周辺に近づいていき、ゲシュタルトが自分の中で立ち上がってきたらまずはそれでいいわけです。

文章の書き方なら、カフカは一晩ぶっ通しでその世界に入り込んで小説を書き、ウイゲンシュタインやニーチェは断片的に自らの思想を記述し、村上春樹は毎日4000字書き続けた、ということが分かり、今書きたい何かのために道具として活用できればそれでいいんです。ブログなら、サイトや記事の構成を真似して違和感あるところをマイナーチェンジしていけばよくて、そうやって模倣と自分の方法は交わっています。

分解・分割と模倣

デカルトは「困難は分割せよ」と言っただけらしい。何か問題を解決したい時には鉄則とされている。数学で言うところの因数分解で、自分が扱えるサイズに分解してから取り組もうという心掛けです。習慣化についてもよく言われるのは、しんどくないところまでハードルを下げなさい、ということ。

でも案外これは簡単なことではない。例えばパソコンのパーツを分解するのは違って、問題解決における分解は、「抽象的な何か」を「より小さい抽象的な何か」に分けるものです。だから単に分けるのが大事だと言われても、それで「はい、分かりました」とはならない。

パーツの模倣が全体の雰囲気を作る

問題解決に限らず、既存のものをブラッシュアップする場合も同じですよ。漠然と全体を眺めるのではなく、部分に分けてパーツごとに見ていきます。模倣を考へても分解の感覚は重要で、全体を丸ごと真似して取り込むのは難しいので、パーツごとに観察して、パーツごとに真似するわけです。部分の模倣を繰り返すから、結果として全体を模倣できたということになる。

例えば、勉強の仕方について考えるとき、本やサイトで提示されているままにやるだけでは基本的にはうまくいかない。個人の具体的な方法ではなく、何となく全員に当てはまるようなやり方が提示されているものだからです。そういう一般的な話ではなく、具体的な個人を見つけてきて、その人のやり方を真似する場合を考えてみる。

真似しようと思えば、その人が勉強について語っている動画や記事などを眺めるだけではなく、各領域に分けて見ていくことになる。具体的には、勉強時間、午前中なのか午後なのか、馴染みのない分野に手を出すときの振る舞い、目を使うか耳を使うか、ノートはアナログなのかデジタルなのか。いくらでもズームして見ることのできる領域があって、自分が満足するまですべてのパーツごとに分析して模倣するから、全体としてそのやり方を真似できたことになるわけですね。それでも部分的かもしれませんが。

もちろん実際はそのやり方のままでうまくいくことはなく、自分には合わない箇所を調整していくことで、誰かのやり方と自分が気持ちいいように修正したやり方との組み合わせで、自分の方法が確立されます。

勉強に限らず、そもそもの生き方のようなものについても同じですね。さっきの所ジョージの話でも、別に全く同じように生きたいということではなく、生活の中での遊びについて、面白そうな感覚を持てるような気がしたんですね。

で、遊びの精神といっても、これではぼやけている。もう少し分割して「生活の中のこの場面でこんな振る舞いをする」「この場面でこう考える」というのを読み取ろうと思いました。

世田谷ベースという雑誌は「日常のあらゆる場面でどんなことを考えてどう遊んでいるのか」「部屋にあるどんなアイテムで、どうやって面白い今日を過ごすのか」の実例集です。時計を使ってどう遊ぶのか、ただの缶をどう使うのか、ガレージで友達を集めて射的大会を開催した回があれば、ギターや車で遊んでる回もあったと思います。

そう考えてみても、分解・分割の感覚は面白くて、どのサイズに分割してどのパーツを模倣したいのかと考えていくと何かと捗りますw

ブログだったら、いい感じのサイトのレイアウトを自分のところで実現しようと思うと、漠然と真似しても雰囲気と同じにはならないんですね。だから結局、いちいち細かくパーツごとに見ていくしかない。部分ごとのずれが全体としてのずれになるので、一個ずつ比較して真似すれば、引きで見たとときのシルエットを模倣できるわけです。

分解という価値創造

ここまで模倣における分解・分割の話を見てきましたが、模倣に限らず、人に何かを提供するときにもこの感覚が出てきます。「その人が求めていることや喜んでくれることは何か」を考えるのも、分割の仕方の問題ですよね。つまり、なんとなく全部含まれているようなものをそのまま渡しても喜ばれるわけではないということです。

ついでなのでブログの場合で考えてみると、例えばもしブログの全体的なテーマとして「人生」を挙げたとすると、それはサイズがでかすぎますよね。「なんとなく人生全般について扱います」では広すぎて情報がないのと同じです。その中で特にこの部分をこう扱うという形で絞るから、見る人にとって分かりやすく受け取りやすくなります。

適当に範囲を広げて「この中にはあなたが欲しいものもあるはずですよね」という形で渡すのは思いやりがなさ過ぎます。名探偵コナンの13巻だけ欲しい人に全巻あげようとする感じ。猛烈にガッツですw

なんなら、部分に分けたほうが価値が高くなる場合もあるのです。思い出すのは小学生の時に近所にあったカードショップ。ポケモンカードを100枚持って行くと100円がもらえました。子供相手になかなかあくどいことをしてるような気がしないでもないが、何度かそこにカードを持って行きました。

するともちろん100円もらえますが、そこには普通に売れば100円以上するレアカードも何枚か含まれてたんですね。つまり、「そのカード一枚」という部分で渡せば高い価値として認められるものを、「受け取る側にとって価値の低い全体」として渡してしまっていたのです。

こんな感じで、「その人が欲する、または最も価値を感じる適切なサイズ」があるので、だからこそ分割についても考えてみると面白いんですね。

おわりに

というわけで、今回は模倣と自分の方法について見てきました。次は、「完成とは何か」について、いくつか書いてたりするのでまた出せたらと思ってます。

「完成は目指すべきものなのか」「そもそも完成とはなんなのか」というのは作品とか創作に関わってくるんですね。最近、生活もその一日の創作であると思っていて、これをある程度小さな単位として、人生が創作されていくものだと思ってます。

そうありがたい人生が完成品だと考えてみたとして、でも毎日過ごすのは、まだ未完成で途中の部分としての一日です。じゃあ、「これで完成しました」という何かに触れることはできるのかということです。

例えば、作品で言うといわゆる断片集のようなものは、本来の意味の完成品ではありません。それを作ることを目指し、それが無事に終わって生まれたものではないですよ。一つの作品という同じゴールに向かわずに、それぞれバラバラの時間にバラバラの目的で書かれた文章が、後になって一つの表紙に挟み込まれることになったのです。じゃあ、完成は未完成の最中に生まれるものなのでは？ということです。

すでに自分の手を離れて一つの塊とみなせたものだけが作品なのではなく、現在進行形のまさに自分がまだそこにべったりくっついているようなもの、未完成であるために今なお完成を目指している最中のもの、それ自体が完成品という見方もできるはずですよ。

もっと具体的にいうと、結論が出ていることのみが完成品たり得るわけではないのではないのでは、ということです。もっとコンテンツっぽく言えば、すでに解決したことだけがコンテンツになるわけではないのでは、ということです。

今まさに解決しようともがいているその試行錯誤の模様、つまりその問題からまだ離れることができている有様そのものも作品となるはず。日記とも小説とも論文ともブログとも言えない何か、そこにまとめられていても、いや、まとまっていなくても、そのままそこにあるだけでもいいのではないかとということです。

別に文章に限らず、生活や人生において解消したい事柄、探求したい何か、謎の停滞感、仕事、がだるすぎる、などなど、日常的に頭を渦巻くいろんな思いがあるものですが、それを創作という形で出力するという話をしています。別に歌ってみてもいいと思います。

少し前はそうやってもがいていたことは、あとで誰かのためのコンテンツになる、人生のグライフで言えば、谷の部分はその絶対値の二乗がエネルギーになると考えればいいという話をしていました。もちろんそれはそうなのですが、その最中にしか生まれないものもあるということです。全部終わってからその後で過去を振り返る形で話し始める、まとめ始めるのではなく、それは公開するかは別として形にしておくのがいいと思っています。

伝統的な情報発信の文脈で言えば、どこかのゴールに向かって取り組んでその過程やストーリーがコンテンツになる、ということですが、そんな安っぽい言い方をしなくても、本当にシンプルにその瞬間のその人にしか作れないものということです。それが商品として価値をもつかは他のあらゆる要因で決まることですが、やってつまらないことはないはずです。

で、そう思って実は実験的に本を一つ書いてみたんですね。今気になっている問題とかテーマに対して結論が出てから綺麗にまとめるんじゃなくて、それを明らかにしようと考えているその過程をそのまま文章にした形で書いてみました。

だから、「これが結論で、その根拠は～」という風には全く進みません。答えが出てるのかも怪しいです。でも「考える」と「書く」を一体化させて進めてみると、満足いくまで考え終わったときには、その道中の軌跡がそのまま読み物として残っているのです。関心の領域が重なる人には面白いものになっているかもしれません。

そんなわけで、創作における完成とは何か、またその延長として、未完成という完成品である今日一日をどう創作していくか、というのが最近のテーマなので、また進展があり次第配信していくと思います。

ということで、最後盛大に話がそれたんですが、今回は模倣と自分の方法についてでした。ここまでお読みいただきありがとうございました。質問や感想などもご自由に。それでは！